北宋開封の都城社会と住民文化

中央大学大学院文学研究科
東洋史学専攻博士課程後期課程
松田　亮

本論文の目的は、北宋開封（960-1127）における都城社会と住民文化について、時間的・空間的変遷の観点に基づいた史料的考察を通じて、当時の城内における社会的構造や文化的特質を明らかにすることである。本論文のテーマである「都城社会」とは、王権が所在し国家における政治・軍事・経済の中心となる都城と、その城内外で形成された多層な人的交流の諸相を指す。また「住民文化」とは、それらを構成する上で必要不可欠な士大夫官僚・軍人・商人・僧（道士）・庶人といった城内住民の活動と、彼らの衣食住をはじめとする生活様式を指す。当時の東アジア全体において、中国の都城がその文化的発展に大きな影響をもたらした点は、唐宋変革論を軸として、これまで多くの先行研究によって明らかにされてきた。したがって、北宋の都であった開封城における社会・文化の解明は、当時の歴史を理解する上で重要な意義を有しているのは疑いない。北宋開封城の都城構造と城内外を利用した儀礼空間の変遷については、久保田和男氏によってその過程が明らかにされており、当時の士大夫官僚を中心とした政治的変動と密接なかかわりをもっていた点が指摘されている。加えて宋代史全体でも、士大夫層を中心とする政治史像の構築がなされている。とはいえ、北宋開封城のような多階層からなる城内住民の存在に着眼したものは必ずしも多くはない。当時における住民文化の発展については、北宋末の記述が多く、「繁栄」を極めたとされる徽宗期以前の過程或いはそうした都城像全体についても少なからず検討する必要がある。すなわち本論文の意義は、北宋開封城における多層な城内住民の側面から、当時の社会・文化の特質を新たな角度から見なおすことにある。

各章の論点を簡潔に整理すると、以下のようになる。

第一章では、北宋開封に対するこれまでの研究成果と論点を洗い出した上で、都城の構造と機能の側面から残された課題を整理し、北宋開封における都城社会と住民文化の特徴について指摘した。まず、関連する研究成果を渉猟・整理していく中で、「清明上河図」と『東京夢華録』の北宋末徽宗期を対象とした描写・記述が、しばしば北宋全体の事象として見做されている場合がある点に言及した。ゆえに、近年の考古発掘による復元研究を踏まえつつ、正史以外の筆記史料、石刻史料、文学作品をも含めた文献史料を複合的に活用し、北宋全体の中で、時間的・空間的に都城社会・文化が変貌していく過程を明らかにしていかなければならないことを強調した。次に、都城の構造と機能という側面から、具体的な検討箇所について、都城プラン、城内交通・水利、寺観・池等の施設に分類し、それぞれ分析を加えた。すなわち、こうした城内の空間構造のもとで、都城社会が発展し、住民の生活文化も変化していくという観点を提示した。さらに、当時の住民文化について、衣食住・年中行事、宗教信仰・文学に分類し、それぞれ論点と課題を述べた。以上の分析から、北宋開封の諸相を考究する上では、城内空間の変遷と城内住民の生活文化の変容を含めた、時期ごとの社会的背景に基づく考察が必要であるとした。

第二章では、城内社会と住民文化の関係性を明らかにすべく、当時の代表的年中行事である上元観灯を事例として分析を行った。まず、上元観灯の行事自体は、唐代においても開催されていたが、北宋より民間から皇帝側の行事に組み込まれていった。宋初では、上元・中元・下元の三元にわたって催され、太宗期の淳化元年（990）に三元観灯から上元観灯へと観灯の役割が一本化された。次に、観灯行事中の行幸場所は、宋初は宮城の門楼を除けば相国寺が中心であった。真宗期になって、外城東南部の道観建立が、上元観灯行事の空間的変容に影響を与え、行事が都城空間の中で徐々に王権儀礼としての性格を強めていった。さらに、上元観灯は「与民同楽」の政治的意図とは裏腹に、皇帝の出御如何にかかわらず、城内では夜禁が解かれ、諸々の催しが行われている場合があった。すなわち、王権儀礼としての性格を持ちつつも、民間行事としての性格も維持されていた。とりわけ、仁宗期明道二年（1033）から、嘉祐七年（1062）にかけての、士大夫らによる観灯中止の議論では、城内住民の存在が一定程度意識されており、城内の現状を反映した政策提起がなされていた。以上の考察を通じて、上元観灯という行事が、当時の繁栄ぶりを物語るだけでなく、北宋開封全体の時間的・空間的変遷と連動しており、皇帝側と多層にわたる城内住民との関係性の一端を窺い知ることのできる好例であるとした。

第三章では、前章の事例を補完するべく、もう一つの代表的年中行事である金明池・瓊林苑での「金明池争標」を事例として分析を行った。まず、両園林は太祖期において既に完成していたものの、行事がとりおこなわれたのは太宗期になってからで、少なくとも当初は必ずしも春遊行楽を利用した「与民同楽」という年中行事の形ではなかった。次に、行事自体は太宗期以降、民間から皇帝側の行事に組み込まれていった。真宗・仁宗期以降は城内の行幸自体は軍事的な要素は少なくなるとされるものの、大中祥符六年（1013）には真宗の命によって金明池に軍備増強の目的で軍営が設置されており、水嬉や宴射自体も単なる娯楽的なものにとどまらなかった。加えて上元観灯同様、史料では度々行事開催の中止が記され、臣下への支賜は従来通りの規則に従って例年通りとなる場合もあり、王権儀礼としての目的を持ちつつ、民間行事としての性格も同時に維持されていた。さらに、両園林の蔵氷にも着目した。氷の採氷・管理は古来より儀礼の重要な要素であり、北宋開封でも、建隆二年（961）に冰井務が設置され、神宗期熙寧五年(1072)には、その採氷・蔵氷地点に金明地・瓊林苑が選ばれた。氷の切削と収集は厳重に管理され、年間貯蔵量はおよそ 2.7 トンに及び、当時の城内住民の生活文化に影響をもたらした。すなわち、金明池・瓊林苑の両園林における諸行事の展開は、北宋全体の時期的背景と連動しており、単なる「与民同楽」の装置としての機能を超えて、当時の城内社会と密接にかかわっていたのである。

第四章では、成尋『参天台五台山記』に着目し、神宗期における開封城内の社会・文化を考察した。まず、史料中の関連記事と、近年の城内復元研究の成果に基づき図示化し、成尋滞在時の北宋神宗期開封の城内空間について分析した。日本からの渡航僧であった成尋が開封に到着した熙寧五年（1072）10 月 12 日から同年 11 月 1 日は、城内への入城から諸寺観への参拝が記され、五台山より帰った熙寧五年 12 月 26 日から翌年 4 月 15 日までの記載では上元観灯をはじめ様々な城内での生活について言及している。当時の生活圏は、居住した太平興国寺伝法院を中心に宮城と近接し、西府などの官庁街へも行き来した点が確認された。次に、成尋の城内での活動と当時の仏教信仰の背景を検討し、新法改革を中心とする神宗期の政治的変動に合わせた城内プランの変容から、仏教寺院が禁軍軍営地に代わって

建立されるなど、仏教信仰の世俗化が顕著であった点に言及した。一方こうした寺院・僧の優遇は哲宗期に改めて新法批判のなかで問題となった。さらに、『参記』をはじめとする諸史料に散見される浴堂（浴室）施設に着目し、当時の城内には都城民も利用可能な公共の浴室施設が存在しており、僧俗の別なく士大夫層に利用されるなど、多機能かつ多階層の人々が集まり交流する場であったと指摘した。また、浴堂は酒店や茶店などと併合する形でも運営されていたことを明らかにした。すなわち、成尋『参記』の記述が、神宗期の都城開封における浴室施設を代表とする城内生活空間の諸相と、城内の仏教信仰の世俗化をあらわす好例であるとした。

第五章では、当時における城内住民の宗教信仰と都城空間の変容を明らかにするべく、城内の代表的仏教寺院である相国寺に焦点を当て、分析を行った。まず、正史や『宋高僧伝』などから、相国寺の存在は唐代以降明らかになり、五代時代に入って都が開封に置かれたのを契機に、皇帝側との結びつきが強まったのを確認した。次に、相国寺が皇帝側にとって欠かせない空間であったことを『宋史』、『続資治通鑑長編』及び『宋会要輯稿』から明らかにした。一方で、相国寺が城内における統治の有様を国内外にみせつけるための格好の空間であり、城内の人々にとっては、生活のための場であった点を明らかにした。さらに、相国寺に関連する南宋以降の史料をとりあげ、相国寺が北宋という時代を懐古する上での格好の題材となった点に言及した。また、空海が相国寺を訪れたという伝説は、現存史料からは詳らかにはできないが、相国寺が北宋開封を代表する場であったという認識が形成された結果に起因するものであるとした。明代では『如夢録』や当時の地方志に「汴梁八景」の一つとして相国寺が含まれており、とくにこの時代からランドマークとしての役割を果たしていたと述べた。

第六章では、李濂『汴京匁異記』に着目し、北宋開封に関連する旅行記・回顧録・漢詩・地方志・文言小説といった様々な性格を持つ史料から、当時の城内住民の生活文化と城内社会の特質を考察した。まず、『汴京匁異記』の史料的性格・価値を再検討し、全八巻、計百六十六のエピソードが収録された記述内容が、当時の筆記史料や『夷堅志』を中心とする志怪小説から抜粋されており、その分類・収録基準には未だ解明されていないものの、地方志や逸文を広範に収めており、一定の史料的価値を有するとした。次に、史料内にみえる登場人物や舞台を城内復元図に対応する形で整理した結果、城内外の随所において物語が展開され、士大夫のみならず、多層な城内住民たちが登場人物となっていた点が判明した。また、その記述内容をみていくと、他史料とも整合性があり、登場人物の身分や城内の名称だけでなく、当時の城内社会や上元観灯など住民の生活文化について多く言及され、北宋開封城内の諸相を考究する上での好例として扱うことが可能である点を指摘した。さらに、史料の編纂背景と南宋以降の開封が、象徴的な都城空間として認識されるようになった過程を考察した。すなわち、北宋開封における都城社会と住民文化を考究する上で、城内を舞台とした志怪小説およびそれに属する史料記述が有用である点を指摘した。

以上、各章にわたる考察を通じて、北宋開封における多層な人々の社会的交流と多様な生活文化が、徽宗期以前の過程において、時期ごとの政治的背景に基づく都城空間の変容と城内住民の生活様式の変化に合わせて変貌していった点を明らかにした。